

2015 年度湘南藤沢学会「研究助成金」成果報告書
慶應義塾大学 SFC 諏訪正樹研究会「まとうプロジェクトフィールドワーク」

慶應義塾大学環境情報学部 4 年 仲 清花

1.活動日程・会場

日時：平成 27 年 10 月 11 日～10 月 12 日

場所：仙台にて、「まとうプロジェクトフィールドワーク」を実施した。

参加者：仲清花（環境情報学部 4 年）、小島汐里（環境情報学部 4 年）、小関美南（総合政策学部 4 年）

2.活動の目的

本プロジェクトは、光・服・建築というそれぞれ異なる分野で卒業研究を進める学部 4 年生 3 名で構成されている。異なる研究テーマで「からだメタ認知」（諏訪, 2012）を行っている 3 名が共にフィールドワークに行くことで、光×服、服×建築、建築×光というように、互いの軸に基づく着眼点を交換し合い、それぞれの研究に刺激を与えることが本プロジェクトの目的である。また、「まとう」には、「①間（を）問う」「②待とう」「③(身に)纏う」の 3 つの意味が込められている。それぞれが持つ研究の軸(光、洋服、建築)を基に「間を問う」ことから始め、それぞれが「からだメタ認知」をし、お互いの分野の関係性について議論することで、それぞれの感性をさらに開拓しようと考えている。

先述した「からだメタ認知」とは、身体と環境の間で生起する事柄を、ことば化することで意識上に持ち上げる努力をし、身体と環境のインタラクションそのものを進化させる行為である。私たちが所属する諏訪研究室では、「からだメタ認知」という手法を用いて、鋭い感性や発想力を備えたからだを育むことを日々行っている。これと「協調学習」（三宅ら, 2011）という概念を結びつけたのが、申請者らが提案した「メタ認知的協調学習」（小関ら, 2015）という新しい学習メソッドである。協調学習とは、学び手同士がそれぞれの考えを共有する中で、互いの考えに影響を受けながら自分の考えを深め、自分なりの答えにたどりつくことを促すものである。メタ認知的協調学習は、これまで身体スキル学習の領域で提案してきた学習メソッドであるが、空間認識における感性を対象とした学習においても有効であると考え、本プロジェクトが発足した。

3.活動成果

今回のフィールドワークでは、美術や映像文化の活動の場として設立された「せんだいメディアテーク」を中心に仙台のまちを議論しながら歩いた。同じモノを見ている、研究分野の異なる 3 名は発することばも異なる。この違いを利用し、互いの空間体験における着眼点を増やすためには、3 者の議論が有効であると考えた。まち歩きの方法に関しては、「まち観帖」（諏訪ら, 2012）に則るものとする。歩いている最中の議論はすべてそれぞれが身につける IC レコーダーで 2 日合わせて約 7 時間分録音した。この録音データを元に、お互いの知見をどのように議論の中で交わし合い、それぞれが新たな着眼点を得たかを分析した。そして、この分析を基に、慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス主催の Open Research Forum にて展示するための冊子にまとめた。その内容としては以下の三つを取りあげている。

①光の側面から建築・服について語る

せんだいメディアテークは「ターミナルではなくノードとしての機能を果たす」というコンセプトがある。このコンセプトから光と建築・服の関係性について考えた。光というのは人が生活する上で切っても切り離せない存在である。つまり、光というのはせんだいメディアテークの機能と同じく「ノード」なのだ。光をまとう建築や服はそれだけでその印象が変わり、温かみがあったり、鋭いイメージをもたらす。光の作用というのが建築空間での居心地や衣服を着たときの着心地に大きく関わる。

②建築の側面から服・光について語る

せんだいメディアテークの外装を見た際に二つのことを思った。一つ目が、建物の中にある構造物は鉄骨でできているも関わらず、揺れ動くスカートのプリーツであるように見えたこと。二つ目が、建築が外の自然を中に綺麗にくっきりと取り込み、その様子は建築物が光合成をしているようだった。動かない建築物がまるで生命体のように見えるとは、服や光の軸を身近に感じながら建築物を目にしたからであろう。

③服の側面から光・建築について語る

せんだいメディアテークの館内にあった赤いソファ。これを見た時私たちは着心地と居心地について考えた。着心地と居心地はなんとなく似ている。そのなんとなく似ている、という部分に、実は私たちの試行錯誤が関わっているということに気付いた。着心地の良さや居心地の良さを探るのに私たちは自分のからだを動かして探る。からだを介して感覚を探るというのは全てにおいて共通なのかもしれない。

4.活動の展望・課題

今回は活動の拠点として建築物的に有名な「せんだいメディアテーク」を選び、せんだいメディアテーク内やその周辺を歩き回り、そこで知覚したモノゴトについて議論を交わした。そして、建築をメタファーとして服や光について論じることや、逆に建築を他の二つの軸（光・服）をメタファーとして論じた。しかし、これでは主軸が「建築」になっているので、光と服を主軸にしたフィールドワークも行う予定だ。そして、最終的には光・服・建築が作用し合う6方向の関係性を導き出したい。因みに、光のフィールドワークとして、光学ガラスを使った製品を扱うFrom Nowhereというブランドの展示会にはすでに足を運んだ。服のフィールドワークとしては、実際にアパレルブランドが多数入るデパートなどに行くことを想定している。

衣服、建築、光だと、一見互いの研究が重なり合う場面は少ないように思えるが、「身にまとう」という肌感覚を共通項として持つことで、互いの似ているところ、違うところを各々の研究に取り入れ、研究を促進させたいと考えている。

5.謝辞

まとうプロジェクトのフィールドワークを行うにあたり、湘南藤沢学会様に厚く御礼申し上げます。